2018 年 5 月 16 日発行

冬大会シンポジウム総括

ドイツ哲学・社会学における価値論争再考

Reconsidering the value discussion in German philosophy and sociology

横山　陸

本シンポジウムは「価値論争」の再考をテーマに、ニューヨーク工科大学教授のケリー氏と慶応大学講師のシュトラースハイム氏を招聘し、それぞれ「実践知と実質的価値倫理学」と「アルフレッド・シュッツと『見識ある市民』がもつ価値」と題する講演（英語）をいただき、それについて議論を行った。価値論争とは、19世紀末から20世紀初頭のドイツ語圏における哲学および社会学における「価値」問題をめぐる論争であるが、ケリー氏には、現象学派の価値論である「実質的価値倫理学」のアクチュアリティを実践知との関係から論じていただいた。ケリー氏によれば、私たちの自己には、しばしば「経験的自己」と「理想的自己」とのあいだの対話的関係が見いだされるが、こうした自己との連関において、何かを「価値づける(valuing)」という行為が為されているという。講演では、この「価値づけ」の構造が、さらに（ライバルに奨学金の締切日を教えるかどうかという）道徳的ジレンマを例にして具体的に説明された。その後の質疑応答では、とりわけ「価値づけ」と道徳的ジレンマとの問題をめぐって会場と議論が交わされた。たとえば、道徳的ジレンマにおいて各人の答えが異なるとしても、それが自己との連関において「価値づけ」られた解答である限りは尊重されるべきか否かなど刺激的な質問が投げかけられた。

シュトラースハイム氏には、社会学における「価値」の問題を、ウェーバーの「価値自由」へのシュッツの応答という観点から論じていただいた。シュトラースハイム氏によれば、シュッツの立場は、私たちが決して価値を客観的に正当化できないという「価値懐疑主義」であるが、価値の「客観」性の代替案として「典型」という概念を展開しているという。社会における個人の選択的行為は「価値づけ」という行為に他ならないが、こうした選択的行為はふつう「典型化されたパターン（tipical patterns）」にしたがって為されている。「典型化されたパターン」それ自体は、変化へと開かれているが、人々はたいてい変化へ消極的な態度をとるので、「典型」はより良い選択肢に対して盲目となる危険性がある。だが「見識ある市民」は、「典型」への無批判な順応から抜け出し「理に適った」選択を行うことが可能であり、そうした「典型」からの超出が、哲学と社会学の共同作業には要求されていると結論づけられた。その後の質疑応答では、とりわけシュッツ自身の価値論における哲学と社会学の位置づけ（彼の方法論は哲学なのか社会学なのか）をめぐって議論が行われた。

今回のシンポジウムは、現象学派の「実質的価値倫理学」およびシュッツの価値論という哲学・社会学においてあまり知られていない領域を概観できただけではなく、会場との議論を通

じて、個人および社会レベルにおいて、私たちがいかに「価値づけ」行為を遂行しているのか、という点を再考することができたのではないだろうか。この点をシンポジウム全体の成果としたい。